

Vol.
004

BUNBU

関西国際学園 初等部 教育白書

Elementary School
Education white paper

関西国際学園 初等部 学校説明会
学校見学会・体験授業（要申込）

- 10月10日（土） スポーツデー
- ▶ 10月17日（土）・18日（日） 第2回 入学試験
- 10月21日（水） 第4回 編入説明会
- 10月24日（土） 第5回 学校説明会
- 11月10日（火） 第5回 学校見学会・体験授業
- 11月24日（火） 第5回 編入説明会
- 11月29日（日） 第6回 学校説明会
- 12月 5日（土） ウィンターセレブレーション
- ▶ 12月12日（土） 第3回 入学試験
- 1月27日（水） 第6回 編入説明会
- ▶ 1月31日（日） 第4回 入学試験
- 2月16日（火） 第7回 編入説明会

入学（編入）に関してのご相談は、お気軽にお問合せください。

関西国際学園 初等部 TEL.078-882-6680



関西国際学園
公式FaceBook

学園長著書より

1期生との交流会

国際教養大学講演会ご報告

初等部G5
澤田百々華スピーチ

「未来の教育」
茂木健一郎氏

関西国際学園カリキュラム・ラボ顧問/脳科学者

特別講演



特別
講演

この学校に日本、 そして世界の教育の未来がある！

茂木 健一郎氏 講演会 2015年7月26日 関西国際学園 神戸校 1F カフェテリアにて

茂木 健一郎 kenichiro mogi

脳科学者 1962年10月20日東京生まれ。

東京大学理学部法学部卒業後、東京大学大学院理学系研究科物理学専攻課程修了。理学博士。理化学研究所、ケンブリッジ大学を経て現職。専門は脳科学、認知科学。「クオリア」(感覚の持つ質感)をキーワードとして脳と心の関係を研究するとともに、文藝評論、美術評論などにも取り組んでいる。

2005年、『脳と仮想』で第四回小林秀雄賞を受賞。

2009年、『今、ここからすべての場所へ』で第12回 桑原武夫学芸賞を受賞。

2006年1月～2010年3月、NHK『プロフェッショナル 仕事の流儀』キャスター。

2012年、日本人で初めてTEDカンファレンスの舞台に立った事でも注目を浴びる。

他、現在も、様々なフィールドで活動している。

2014年、関西国際学園カリキュラム・ラボ顧問に就任。

アメリカのすごさを実感した日米学生協議会

今日の講演のタイトルは「未来の教育」です。

僕は関西国際学園を全面的に応援しています。ここで行われている教育は素晴らしいですし、ここに集まっている子どもたちも素晴らしい。この学校に日本、そして世界の教育の未来があると思っています。なぜそう思っているかということ、これからお伝えしたいと思います。

僕は小学校・中学校・高校・大学とずっと日本の教育を受けてきました。成績は抜群でした。小学校・中学校は公立学校、高校は東京学芸大学附属高校という、東大に100名近く入学する高校に通いました。大学は東京大学です。大学院も東京大学で、理学部と法学部の両方を出て大学院に行ったので、東京大学に11年いたことになります。ですから、僕自身のエデュケーションは日本のエデュケーションですけれども、ずっと何か違うと思っていました。

何が違うのか。最初に違いに気付いたのは1984年に参加した日米学生会議の場でした。日米学生会議というのは、日本とアメリカ両国から学生が集まり、様々な問題を議論する学生による国際交流の場です。1年ごとにアメリカと日本交互に開催していて、僕は試験を受けて選ばれ、アメリカで開催された日米学生会議に参加しました。日米学生会議では、初日の夜に両国の学生の交歓会があります。我々日本の学生は、その出し物を何にしようかと事前に会合を重ねて、ものすごく練習して参加しました。

一方、アメリカは国土が広いので、全米から学生が集まってくる。当時はインターネットなどないため、我々日本代表と会うまでに一晩しかありませんでした。それなのに、頑張って練習していった我々より、彼らのパフォーマンスの方が優れていて、その瞬発力に驚きました。

今でも忘れられませんが、それは「Typical American(典型的なアメリカ人)」という出し物でした。学生一人ひとりが自分のバックグラウンドを話すという、ものすごくシンプルなものです。例えば、「私の父はイタリアから来て、私の母はフランスから来て、ニューヨークで知り合って私が生まれました。私は典型的なアメリカ人です(I am a typical American)」。「私の祖父はアフリカから来て、ずっとニューオーリンズに住んでいましたが、イタリアから来た私の祖母と出会って、私の親が生まれました。私はシカゴで育って、今日に至っています。私は典型的なアメリカ人です」。「私の父は韓国から来て、母はアメリカ生まれのアメリカ人で、二人が出逢って私が生まれました。私は典型的なアメリカ人です」。

自己紹介をして、最後に「私は典型的なアメリカ人です(I am a typical American)」という一言をつけて終わります。

僕たち日本から行った学生は、祖先からずっと日本に住んでいた純ジャパニーズです。それに比べてアメリカの学生は、一人ひとりバックグラウンドが違っている。たいへん驚きました。しかも、多様な背景を持つ学生たちの誰もが「私は典型的なアメリカ人です」と認め合う、そのアメリカらしい出し物が、強烈に印象に残っています。



アメリカでは30年前からクリティカルシンキングが当たり前

日本では今でも、大学名を聞くとすぐに偏差値を計算して「あいつ、このレベルだ」と決めつけてしまいます。でも、アメリカでは大学名なんて、関係ありません。日米学生会議の場でアメリカ人としゃべっていて、彼らは、「どこの大学に通っているかということと、その人が賢いかどうかはまったく関係ない」と心の底から思っていることがはっきりわかりました。その時の会議には、アイビーリーグの名門・ハーバード大学から来ている学生もいたし、オハイオ州立大学から来ている学生もいました。日本では東京大学に受かったら、みんな喜んで東京大学に行きますよね。でも、ハーバード大学に受かった人の中で70%しかハーバード大学に行かない。後の30%は地元のオハイオ州立大学に行くんですよ！

当時、アメリカではマイノリティ(アフリカ人、女性、少数派)をいかにプロモーションするかがクローズアップされていて、入試などで、マイノリティを多めに入学させるというようなことをやっていました。日米学生会議では、そのことについて熱く議論しました。

最近、日本でもクリティカルシンキングが重視され始めましたが、アメリカでは当時から、自分の頭で考えて議論することが当たり前。会議の場では、クリティカルシンキングが空気のように行われていました。

僕は日本の大学で教えていますが、世界の問題についてクリティカルシンキング(ものごとを鵜呑みにせず、自分の頭で、きちんしたやり方で考える)ことができる大学生はほとんどいません。悲しい話ですが、そういう学生が日本にいないことが、非常に大きな問題だと思います。

マインドセットがないと、グローバルに活躍できません

皆さん、日本は先進国だと思っているでしょう？でも、教育に関しては50年くらい遅れています。

1984年当時から明らかだったのは、韓国にしても、台湾にしても、中国にしても、インドにしても、インドネシアにしても、どの国でもマインドセット(考え方の基本的な枠組み)ができているということでした。それは、日本のエデュケーションの中には、未だにないものです。

マインドセットが何なのかを説明するのは非常に難しい、関西国際学園に来て空気に触れてもらうしかないのですが、明らかに何か違います。グローバル・エリートと呼ばれる、インターナショナルに活躍しているような人は、みんなマインドセットを持っているんですよ。逆に言えば、マインドセットがないとグローバルには活躍できないのです。

僕は東京大学を出てから理化学研究所で働き、その後、ケンブリッジ大学に入学しました。イギリスの大学はアメリカの大学と雰囲気は少し違いますが、ケンブリッジ大学は、すさまじい賢さの人たちがいるところでした。ある時、そのケンブリッジ大学に、東京大学の教授が来られました。日本の大学関係者は、「俺、東京大学の教授だし」というようなややこしい感じが漂っています。でも、イギリス人は、その人と直接話をして、その人が話す内容や何を考えているかで知性を判断します。「私は、東京大学の教授なんですが…」は自己紹介でしかないんですね。それから先は、話をする中でどれくらいの知識や経験、知性があるかを判断していきます。その教授は僕の周りの研究者と話をしたのですが、こいつはダメだと思われたのか、相手にされなくなりました。海外では、容赦ない世界があります。それなのに、「おまえが、ちゃんと俺が東京大学から来たプロフェッサーだと説明しないから、みんな俺のこと相手にしないんだ」と怒ってしまった。

本当は違うのですが「そのややこしい感じ」が、日本の大学すべてに蔓延しています。

僕が毎年参加しているTED(価値あるアイデアを世に広めることを目的とするアメリカの非営利団体)のプレゼンテーションがあります。そこでは、ネームタグにファーストネームが書いてあるだけで、その人がどこに所属しているかということは全く関係ありません。実際に話をして、自分で判断します。ある意味ではフェアですし、ある意味では厳しい世界ですね。そのようなマインドセットが、アメリカには1984年当時からありました。ところで、関西国際学園ではバイリンガル教育で英語に力を入れていますね。どうして英語をやらなくちゃいけないかという、TEDのようなところで外国人と対等に渡り合うこともですが、世の中で情報を得ようとしたら、英語の情報が質・量ともに圧倒的に多くて、英語ができないといろんな情報にアクセスできないからです。英語ができることがスタートライン。しかも、残念ながら英語と共にマインドセットというか、世界についての考え方が形成されます。

これから皆さんのお子さんが世界の中で闘っていくときに、今の日本の英語教育を受けていたら全く太刀打ちできないですし、マインドセットも得ることが難しいと思います。

子どもたちの未来の夢を拓く関西国際学園の教育

ハーバード大学を出て、金融系で何十億も儲けてリタイヤしたアメリカ人を知っていますが、彼がハーバード大学で何を研究していたかという「谷崎潤一郎」です。すごくないですか？東京にある彼の家に行くと谷崎潤一郎の日本語の本がずらっと置いてある、世界のエリートの実像とは、そういうものです。

日本で文科省が「大学教育の中で実践教育を重視する」と言っていますが、世界から見ればナンセンス。教養を深く掘り下げていくことをしなかったら、世界では相手にされないのです。

日本はすごく素敵な国ですが、今は大学のエデュケーションに国際競争力がない。なので、日本の大学に子どもを送ることのリスクはものすごく大きいと思います。その根本的な原因は、日本人が学力や知性とは何なのかがよく分かっていないということです。

皆さんは、アメリカの名門ハーバード大学で最も人気のある授業、マイケル・サンデル教授の「JUSTICE(正義)」をご存じですか？「JUSTICE」の授業では、サンデル教授が日々の生活の中で直面する難問を取り上げて、「君ならどうするか？何が正しい行いなのか？その理由は？」と、学生に投げかけ、議論をして、その判断の論理的正当性を問うていきます。そんなレベルの授業が実際にハーバード大学で行われているということを、深刻に捉えなくちゃいけない。日本の大学の授業と比べると、話にならないレベルですよ。今、インターネットで「JUSTICE」のような海外大学の授業をいくらでも見られます。家でインターネットをずっとかけておきましょう。そういう家庭環境をつくることも大事です。

この学園に子どもを通わせている保護者の皆さんは、日本社会の中では意識も高いし、経済的にも余裕がある方たちだと思います。それでも英語が分からないという状況がありますね。今回の講演では、「JUSTICE」の授業や英語のラジオを聞いてもらったり、ハーバード大学の入試実演に参加してもらったりなど、保護者の皆さんに、むちゃぶりをさせてもらいました。実は、人間はむちゃぶりをされて、それを乗り越えることで成長していきます。子どもの頃からチャレンジを続けることが大事なんですね。関西国際学園自体がむちゃぶりで急成長していますが、関西国際学園の教育方針は僕が知っているハーバード大学やケンブリッジ大学など、いちばん優れた教育の台の上に乗っています。僕は関西国際学園のカリキュラムラボに関わっていて、英語も理系の力(機械やプログラムへの興味)も引き出せるようなカリキュラムにするにはどうすればいいか、という大きなチャレンジをしています。皆さんのお子さんも、今までの日本の教育にはないような大成長を遂げられる、そういうチャンス、ぜひ、この学校でつかんでいただきたい。

最後になりましたが、大学進学の話です。理想としては海外の大学へ行ければいいですが、「外国へ行かせるのは…」という保護者の皆さんもおられると思います。関西国際学園はこれからもっと、子どもの個性をユニークに活かせる場所になるだろうと思いますが、僕の読みでは、皆さんのお子さんが大学へ行く頃には日本の大学の入試も変わっています。一般的な日本の教育を受けていなくても、日本の大学に入れる時代が来ると思います。安心して、関西国際学園で学ばせて、子どもたちの未来の夢にかけてください。

僕は関西国際学園を全面的に応援しています。



Kansai International Academy Presents

Special Seminar

KENICHIRO
MOGI

初等部 G5 澤田 百々華スピーチ

7月26日 茂木健一郎氏の講演のあと、スピーチコンテストで優勝した初等部5年生(G5)の澤田百々華さんがスピーチしてくれました。その時のスピーチの英文と日本語訳を掲載いたします。

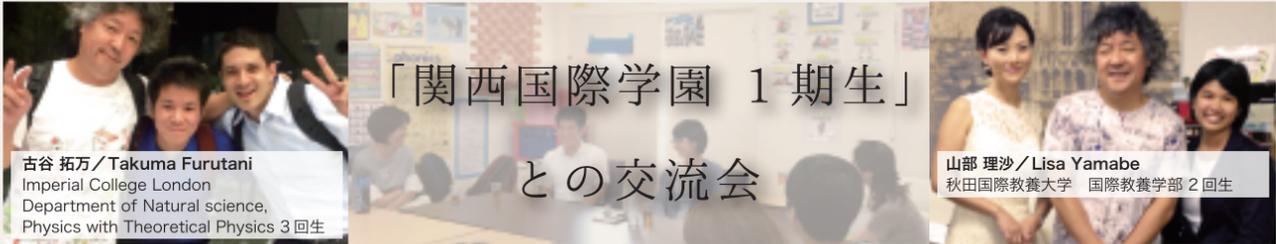
Hello, everyone.
Please stand up. Every woman, sit down.
Look around you. Look to the left. Look to the right. Look back and look forward.
All the man and boy standing around you would be paid more than you.
Even if you do the same job, and even if you are in the same position.
Do you think it is fair? No, right?
Today, I am going to tell you about how woman can be leaders in business, school, and their family.
Please sit down.
But first, I would like to talk about one big quality of a leader. And the quality is ... drumroll!
EMPATHY!
Empathy means thinking from another person's perspective.
It's an important quality because it allows leaders to make fair conclusions.
It's how people think about other people's problems.
Empathy is so important.
Please remember. By the way, it is spelled EMPATHY.
But only men have this quality, right?
No! Of course, not. Women have this quality, too.
Women are only getting paid 78% of what men are getting paid. Yet they are doing the same work.
Equal work deserves equal pay.
In 1970, the pay gap was 59%. And now it's 2015, yet still we have the pay gap of 17%.
For example, if a man gets 600,000 yen a year, his co-worker, a woman in the same position doing the same work, will be getting just 468,000 yen a year.
That is 78% of what a man makes. Equal work deserves equal pay.
Women need to take more leadership roles especially in business.
Do you know the 20% of the CEOs, which is the head of the business, are women?
That means 80% are men. Why?
Are women less empathetic? Are women worse leaders?
No! Women are just as qualified to be leaders.
In fact, I think women can be more qualified than men because women can think about other people's opinion.
Women can balance house work and their jobs.
Women can think about other people's opinion. Woman can be friendly and make the company bigger and brighter.
It doesn't mean that men don't have these qualities.
They both have these qualities. Equal work deserves equal pay.
Don't think in gender stereotypes. We can all be leaders.
Change your mind! The world will change! It will!
We have the right to believe how we want.
We have the right to be what we want to be.
And don't be afraid to chase your dreams.
If your dream is to be a leader, chase it!
Doesn't matter is you are a woman or a man. Equal work deserves equal pay. Thank you.

皆さんこんにちは。全員立ってください。女性は座ってください。前後左右を見渡してください。
ここに立っている男性は、あなたよりも高い報酬をもらえます。
あなたと同じ仕事をして、あなたと同じポジションにいてもです。
これは公平でしょうか？ 違いますよね。
私は女性がビジネス、学校、そして家庭においてどのようにリーダーになれるかをお話しします。座ってください。
まず、リーダーにとってすごく大切な要素についてお話しします。それは・・・ EMPATHY(共感)です。
Empathyとは、他の人の観点からものを見るということです。
なぜ大切かと言うと、公平な決断ができるようになるからです。思いやりをもって他人の問題を見ることができます。
Empathyはとても大切です。覚えておいてください。E-M-P-A-T-H-Yです。
でも、これは男性にしかないですよね？ いいえ！そんなことはありません。女性ももっています！
女性は、同じ仕事をして男性の78%の収入しか得ることができません、
同じ仕事には同じ報酬が支払われるべきです。
1970年には報酬の差は59%でしたが、2015年になってもまだ17%の差があります。
例えば、男性が60万円得られる仕事で、女性は46万8千円しか得ることができません。
男性の収入の78%です。同じ仕事には同じ報酬が支払われるべきです。
女性は、特にビジネスにおいてもっとリーダーシップをとらなければなりません。
CEOのうち女性は20%しかいないということをご存知ですか？ 80%が男性だということです。なぜでしょうか？
女性は男性ほどEmpathyがないからですか？ リーダーシップがないからでしょうか？ いいえ！
女性は男性と同じだけリーダーになる素質を持っています。
他の人の意見を聞くことができるぶん、女性の方がリーダーにふさわしいかもしれません。女性は家庭と仕事を両立できます。
また女性はフレンドリーなので会社をもっと楽しく明るい場所にできます。
もちろん男性にこれらの要素がないわけではありません。どちらもこれらの要素を持っています。
同じ仕事には同じ報酬が支払われるべきです。性別を偏見で見るのをやめましょう。
みんなリーダーになれます。考えを変えてください！
そうすれば世界の見方も変わります！必ず！ 私たちは、自由に信念をもつことができます。
何になりたいかを自由に望むことができます。夢を追いかけるのを恐れなくてください。
リーダーになることを望んでいるのなら、それを追いかけてください！
男性であっても、女性であっても。同じ仕事には同じ報酬が支払われるべきです。ありがとうございました。

国際教養大学 講演会 ご報告

日本でいち早く国際教養教育に取り組み、高い評価を得ている国際教養大学から、
国際センター長の中津将樹氏(当時入試室長)に講演していただきました。
その内容をBUNBU号外と題し冊子にまとめて各スクールに配付しております。ぜひお手にお取りください。
関西国際学園ホームページにも同じものをPDFにてご覧いただけます。
(ホームページ中程左側にあるBUNBUのパナーもしくは新着情報の項目をクリックください。)





「関西国際学園 1 期生」 との交流会

児童:僕は絵を描くことが好きで、描いているときはとても集中できます。お二人は何をしている時に集中することができますか？

山 部:とても良い質問ですね！ちょっと真剣に考えますね。

古 谷:普通に答えると、僕は何をしたら集中するとかではなく、気が付いたら集中してたんですよ。没頭することって「さあ、今から集中するぞ！って始めないじゃないですか」強いて言うなら、何かに取り組んでいる自分がワクワクしていると想像できた時ですね。

山 部:いつもいい事言いますよね！（笑）まさに拓万の言う通りで、好きな事なら結果集中している。バイオリンを弾いていると、いつの間にか時間が過ぎているんです。私はあえて挙げるなら「絵を描く時間」と「バイオリンを弾く時間」ですかね。

保護者:今ピアノをしているんですけど、好きな曲ばかりを弾こうとするんです。もちろんそれでも良いとは思っているんですけど、やはり出された課題に取り組むとか、基礎の練習もね、親としてはしっかり取り組んでほしいなって。

古 谷:僕はとても天邪鬼で負けず嫌いな性格だったので、今思えばその性格を熟知している親の手のひらで転がされていたと思います。無理強いをさせず、自分が取り組まない楽譜を僕の親はあっさり捨てようとしてました。

山 部:私は1年生からバイオリンを始めたんですけど、正直5年生位までは完全に「やらされている」気持ちでいました。5年生くらいから徐々に楽しさが勝ってきて、6年生で好きな作曲家に出会ったんです。中学生になり、友人とバイオリンとピアノとギターでバンドを組みました。そこから自分たちで曲を決めて、演奏してと続けているうちにもっと上手になりたいという気持ちが芽生えて、基礎に戻ろうと思ったんです。そこからは進んで基礎練を行ってました。だからまだ焦らなくていいと思いますよ、まだ1年生ですもんね。

保護者:周りの友人と比べて、自分は「Gifted(才能豊か)」だと思いませんか？

古 谷:Imperial Collegeでは全く思いません。友人の中で多分僕が一番苦労してるし、努力してると思ってます。もし3日講義を受けなければ、大変な事になるでしょうね。日々必死です。

保護者:どんなご両親でしたか？

古 谷:父親は子どもの教育に興味のある人ではなかったです。むしろ家に居なかった(笑)ただ、彼は子ども相手でも常に本気でした。ゲームにしろ、遊びにしろ、僕はこてんぱんにやられてました。そんな日常が僕の性格の一部になっていると思います。精神面で父親に鍛えられ、母親にはフォローしてもらってました。両親が自営業なので、幼少期からお金の動き、社会の動きを肌で感じていました。僕のクリティカルシンキングはそこで培われたと思います。子ども時代に親の職業を知るとは大切だと思います。

保護者:DPの中でボランティアをされたとありましたが、どのようなボランティアをされたんですか？それは自分で見つけたんですか？

山 部:初等部での教育実習と大阪マラソンで選手のお手伝い、またフランス語のスピーチコンテストでのボランティアを行いました。フランス語のボランティアは先生から提案を受けましたが、それ以外は全て自分で考えて行動しました。

古 谷:僕の高校はIB校ではなかったのですが、非常にユニークな学校で卒業生がアフリカでチャリティーを立ち上げるという行動がありました。その団体が毎年高校生を募ってアフリカでのボランティア活動に参加するんですが、僕もそこに3週間参加しました。アフリカでは幼稚園の建設現場の手伝い、実際教壇に立つ経験、また現地の農業の手伝いもしました。このチャリティーに参加するにあたり、ボランティア団体に自ら稼いだ資金を出資する必要がありました(1000ポンド)、そのためにチャリティーウォークを企画して資金集めや協力者を募る行動も行いました。

保護者:アフリカでのボランティアを経験して、価値観は変わりましたか？

古 谷:そうですね。途上国に行くこと自体初めてで、しかも英語はまったく通じない。英語が通じない中でコミュニケーションをどうとっていくか。新たな国で新たな価値観に触れることは大きな学びがあったと思っています。

保護者:関西国際学園を卒業して、日本の中学に進学されて、カルチャーショックはありましたか？

山 部:日本の私立の中学へ進んで最初に思ったことは、なぜ皆んな一人で行動ができないのか？という事でした。食事やトイレも常に誰かと行こう

とする。一番のカルチャーショックでした。もうひとつ驚いたのは、私が英語が得意という事を知ると、それを逆手にとって、英語の答えだけを

を教えるように言われたり、なぜこれが答えになるのかには興味を持たず、ただ答えだけを知りたがる事をすごく不思議に思いました。

保護者:昨年日本の企業にインターンシップに行かれたと聞きましたが、日本での企業体験にカルチャーショックやコミュニケーションで困ったことはありましたか？

古 谷:僕はまったくなかったですね、今と変わらず言いたいことは言っていました。ただ向こうが困っていたかもしれないね。笑

保護者:イギリスでの就労も外国人としては難しい部分もあるのでは？

古 谷:イギリスがEUに入っでの最初の5年は人口の急激な増加を防ぐための外国人の受入れ人数を決めていたんです。ですが、2、3年前にその期間が終了し、大量の外国人が就労の為にイギリスに押し寄せて人口が爆発的に増えているんです。法的に規制が有るわけではないのですが、市民感情としてイギリス人が外国人に仕事を奪われているという意識が芽生えつつあるんです。

それと僕が戦わなければならないかもしれません。

保護者:海外で就労ビザを取るのは大変だと聞きました。Imperial Collegeのような良い大学に行かれていると有利ですか？

古 谷:大学はまったく関係ないですね。結局就労ビザを取る条件は、「イギリスの会社に僕が所属している事」なんです。という事は学歴ではなく、僕を雇ってくれる企業がイギリスに存在すれば就労ビザを取る事が可能なんです。

ラ ボ:就労ビザを取得しようと思うと企業側が非常にお金が掛かるんですね。それだけコストをかけてでも必要な人材であるかどうか、それは彼が言ったように学歴ではなく、その人のスキルや即戦力として何ができる人かという判断ですね。

保護者:人種差別を感じたことはありますか？

古 谷:ありましたね。2回停学になってるんですけど。2回とも理由は人種差別だったと僕は思ってるんですけどね。僕が差別されたと感じて、それが原因で喧嘩になって、停学になったんです。差別する人は絶対いますし、それに対して対応する必要はあるでしょうね。

保護者:Imperial Collegeの入学試験に臨むにあたり、特別な準備・勉強はされましたか？

古 谷:入試制度が全く違うので、まず自分のプロフィール(どのような活躍を高校時代にしてきたのかを示す資料)の質を上げる活動は当然ですが、Imperial Collegeの面接は直前に勉強をしていた程度で対応できるレベルのものではありません。面接官は教授でもあり物理学者なんです。その教授と対等な意見交換ができるレベルを求められます。試験対策というレベルではなく、人生すべてを物理に犯されるレベルですね。目に入る全ての数字が襲ってくるような体験さえしたことがあります。

保護者:根本的になぜイギリスという国を選んだんですか？

古 谷:中学校進学が視野に入ってきた時に、また日本の教育システムに戻るのが嫌で、ある海外留学プログラムの説明会を見つけて親を無理やり連れていったんです。親は諦めさせる為に連れて行ったようですが、説明会を聞く中で、どうしてもここに行きたいと思った学校を見つけてしまったので、親を全力で説得しました。親は基本反対しており、「奨学金」が取れたらと条件をつけてきたので、それをクリアしました。

保護者:奨学金を得る為の試験はどんな内容でしたか？

古 谷:まずは英語そして算数。かなりの量でした。それから面接が日本語でありました。試験は日本で受けました。

保護者:お話を聞く中で今の自己肯定感の高さはどこからやってくるんでしょうか？

古 谷:この根拠のない自信のことですか？笑。 最初に行った公立の小学校ではただダメ！と。そこに納得できる理由がなかった。だから受け入れる事ができなかったんです。でも中村先生は僕の反論に対し、論してくれたんです。君の理屈も分かるけど、今の状況はこうなんだっていちいち納得させてくれた。一切子ども扱いされなかった。だから素直に聞き入れる事ができたと思います。

保護者:関西国際学園を卒業して、良かったと思うメリットと在学中にもってやっておくべきだったと思う点はありますか？

山 部:私はフレンチを中学受験前にやめてしまったので、そこは後悔しています。海外で多国籍の人が集まる学生会議に参加した時に、第二言語としての英語が当たり前の世界があって、そこにいる人々は皆、プラスαの言語を話すんです。例えばインドの人だと英語とヒンドゥー語とさらにもう一言語、そうすることでコミュニケーションが広がり、世界がさらに広がりますからね。

古 谷:僕は良かった事は根本的に関西国際学園では否定されなかつたことが一番大きいです。元々やりたい、やりたくないがとてはっきりしている子どもだったので、その瞬間、瞬間やりたいことをさせてくれる環境があったと思います。だからいつも全力で走れて、そのまま今に至っています。

保護者:やる気の芽をを摘まないって大切ですね。

学園長 著書より

「探究型教育」で生きる土台を強く

日本の教育は、問題を与え、それについての答えをだすよう子どもたちに求めます。課題があり、それに対応する答えがあらかじめ決まっているのです。入学試験の形式ももちろんこの考え方に従っています。ところが、社会にできれば、答えはひとつではありません。若いころの実務は正解を求められることもあります。責任が重くなるにつれ、むしろ正解のない問題にどう対処できるかが問われます。それどころか、課題そのものを自分で見つけだす能力が必要になります。それができない人間は、どこかで成長が止まってしまうものです。

関西国際学園では、さまざまな事態に応じて子どもたちが自ら課題を設定し、それぞれの局面を乗り切っていけるよう、独自のプログラムを展開していきます。これを「探究型教育」と呼んでいます。たとえば、さまざまな分野の第一線で活躍する方々に来ていただいて、話をさせていただきます。一流の人というのは、それぞれの分野で成果を上げているだけではありません。私利私欲を度外視したところで、人のために尽くしているものです。そういう方々を目の前にして、じかに話を聞くだけでも子どもたちには得るものがあります。なにか自分たちで実践できることがあれば、子どもたち自身がその人に倣ってやってみるのもいいでしょう。お母さんたちと話をしていると、「うちの子は理科の点数が悪いんです」「算数がすこし苦手で」そんな声を聞くことがあります。どうしても教科ごとの点数や成果が気にかかってしまうようです。受験や偏差値・テストの点ばかりが頭にあって、小さなところばかりに目がいくのです。

「園内塾」の話で書いたように、受験に合格するには1点差が当落を決めることにもなります。かといって、普段からそこにばかり目が行くのは、本末転倒です。教育の本質は、点を取ることはありません。自ら課題を見つけて、それを解決していく能力を身につけることです。私たちが「探究型教育」と呼ぶプログラムは、子どもたちが将来生きていくうえで、その基盤となる能力を育てようとするものです。これは、前項にも登場した「非認知的能力」に深く関係するもので、今後は積極的に導入を考えています。

「探究型教育」は、予測不能な困難を前にして、子どもたちがそれを乗り越えていける能力を育てていくものです。さまざまな困難があるほうが、やりとげたあとの達成感は大きなものがあります。小さいころからでいい、そこから始めればいいと私は考えています。高等部ができれば、生徒たちをボランティアとして発展途上の国々に行かせ、井戸掘りをさせるという構想もあります。世界の大きさを知り、自分の無知を知り、挫折や苦労をすればいいと思うのです。そこからほんとうの意味での成功体験も生まれてきます。その小さな成功を積み重ねていくこと、その繰り返しが子どものやる気や粘りを育てていきます。

ハーバード大学に進学できる学校を

全国には名前の通った進学校が数多くあります。なかでも灘やラ・サールなど、東京大学や医学部への合格ランキングでつねに上位に顔をだす学校はよく知られています。こうした学校を視野に入れつつ、私たち独自の教育が生かされるよう、進路にも気を使っていきます。具体的には日英バイリンガルの子どもを育成するとともに、特別なスキルを持った人材を輩出するために、医学部などへの進学を視野に入れた教育を実践していくつもりです。

さらに、ハーバード大学やオックスフォード大学など、国際社会に優秀な人材を輩出している世界の名門大学への進学も射程にとらえています。空論ではなく、国際バカロレアの制度を活用した中学校・高校を設立していきます。現時点では、高校2年生くらいからハーバード志望クラス、医学部志望クラスというような受験クラスを設けて、特別授業を実施できればいいと考えています。これは私たちの実践している教育プログラムがあるからこそできることです。すでに学園を巣立っていった子どもたちのなかからも、近い将来、世界の舞台にでていく人材がでてくるはずですよ。